

なぜ今、深さなのか

Scale Outの先にある問い

Why Depth? Questions Beyond the Age of Scale Out

著者: 佐藤 純也 (株式会社らしく 代表取締役 | 一般社団法人Deep Out 4月下旬設立予定)

シリーズ: Economy of Depth — 深さが価値を生む時代のホワイトペーパー集

版: v1.1 / 2026年4月

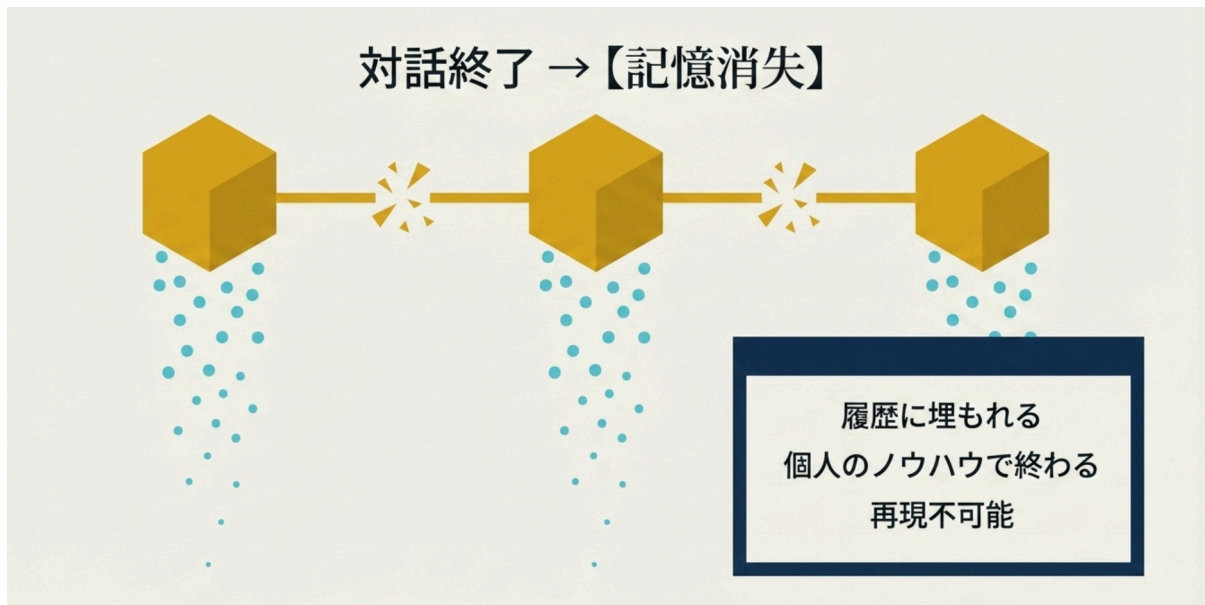
はじめに — 2025年夏の強烈な体験から

チャット型AIの構造的限界

2024年、多くのビジネスパーソンがAIを使い始めた。ChatGPTやGeminiをブラウザで開き、質問し、賢い回答を受け取り、閉じる。こんな経験はないだろうか。

- ・「あのときの素晴らしい回答が、チャット履歴のどこかに埋もれて見つからない」
- ・「AIが生成した文章を、自分でコピー&ペーストして整理するのが面倒だ」
- ・「先週と同じテーマを聞いたのに、AIはゼロから説明し直す」

これらは使い方の問題ではない。チャット型AIの**構造的な限界**だ。



チャット型AIの構造的限界: Chat履歴に埋もれる → 人間がコピペ整理係 → 個人のノウハウで終わる → 再現不可能

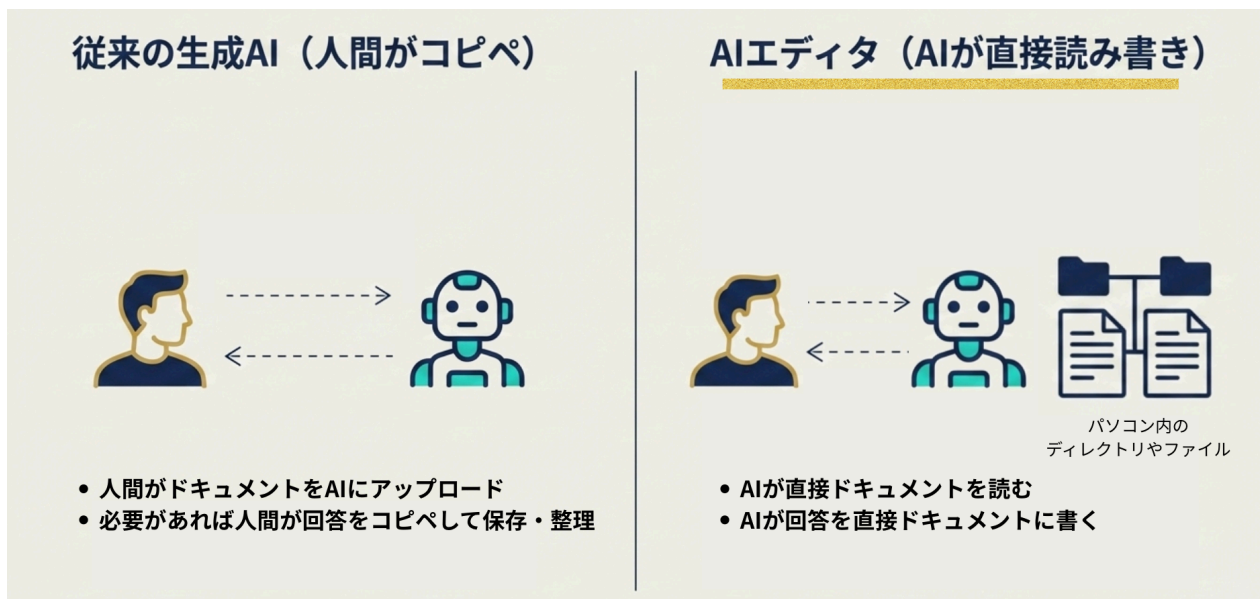
チャット型AIでは、対話のたびに文脈がリセットされる。AIの出力はサービス提供者のサーバー上のチャット履歴に埋もれ、あなたの手元には残らない。素晴らしいアイデアが生まれても、保管するかどうかは人間が判断し、手作業でコピーし、どこかに整理しなければならない。保管し忘れれば、あの素晴らしかった出力に二度と出会えない。

完成した提案書は手元に残る。しかし、「なぜこう作ったのか」という判断基準は残らない。検討したが却下した代替案も消える。判断の根拠となった分析も消える。**完成品は残るが、判断基準と知見は消失する。**

AIエディタという別の道具

2025年夏、私はチャット型AIではなく、**AIエディタ**との協働を始めた。

AIエディタ（Claude Code、Google Antigravity等）は、もともとソフトウェアエンジニアがコードを書くために設計された道具だ。チャット型AIとの決定的な違いは、**AI自身がパソコン内のファイルを直接読み書きできる**ことにある。



従来の生成AI vs AIエディタ: チャット型は人間がコピペで保存、AIエディタはAIが直接ファイルに読み書き

2025年6月28日（土）、私は「すべてのデジタル作品はAIで作れる時代が来る」と考え、このエンジニア向けの道具をビジネスに転用してみた。最初の4日間で、その読みが正しいことがわかった。動画もビジネス文書も作れた。月額100ドルとPC1台で。

しかし、本来の目的とは別の領域が見えてきた。人間とAIの協働には巨大な可能性がある一方、その基盤がまったく整備されていない。AIエディタでは成果物がファイルとして手元に残る。なぜそ

の判断をしたのか、検討した代替案、判断の根拠となった分析——チャット型AIで構造的に失われていたものが、ここでは自然に蓄積される。この構造に可能性を感じた私は、協働の基盤をどんどん整備していった。

ここで一つ、重要な区別がある。AIが自律的に完結できる業務と、人間とAIの協働でしか到達できない領域は、根本的に異なる。データ入力や定型文書の生成は、AIだけで十分だ。しかし、正解のない問いを扱い、判断と言語化が価値を生む領域——企画、事業開発、戦略立案——では、人間の文脈がなければAIは一般論しか返せない。本シリーズが扱うのは、後者の領域だ。

協働が深まるにつれ、構造化された知的アイデアが次々と生まれた。管理が必要なほどの量になったため、全件をブロックチェーンのタイムスタンプ（OpenTimestamps）で記録していった。

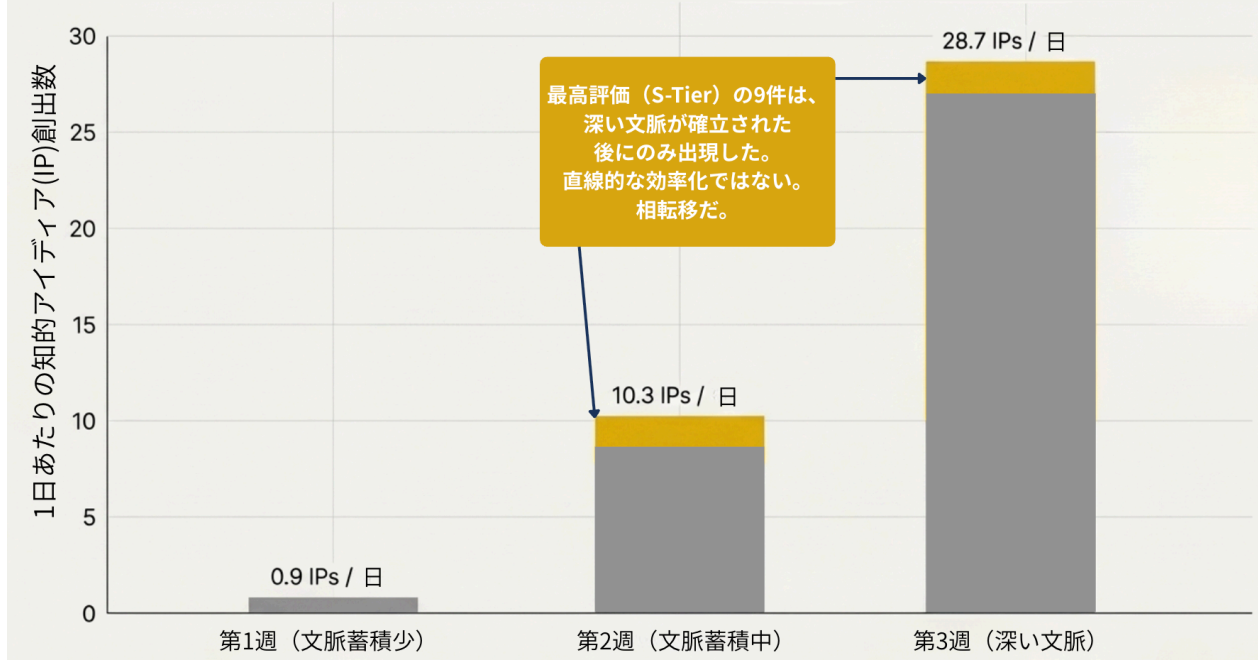
振り返って気づいた質的転換

25日間の協働の後、創出された知的アイデアを整理した。週ごとの創出密度を集計したとき、驚くべきパターンが浮かび上がった。

最初の1週間は、1日あたり0.9件。それでも、チャット型AIでは構造的に起きない現象だ。AIが過去のファイルを読み、文脈を理解した上で、アイデアを構造化して提示してくる。しかし、文脈の蓄積がまだ浅く、AIの応答は「整理されているが一般的」な域を出ない。

3週間目には、同じAIから1日あたり28.7件のアイデアが生まれていた。32倍。しかも、質が根本的に変わっていた。9件のS-tier（最高評価）のアイデアは、すべてこの後半フェーズに集中した。

文脈の蓄積で、創出密度が32倍に 25日・145時間の協働で393件の知的アイデア



知的アイデア創出密度の非線形成長: Day 1-7 → 0.9件/日、Day 8-14 → 10.3件/日、Day 15-25 → 28.7件/日。S-tierは後半に集中

モデルを変えてはいない。追加の計算資源も使っていない。変えたのは、AIとの間に蓄積される文脈の深さだけだ。

25日間。145時間。月額100ドルのサブスクリプションとPC1台。

10ヶ月後、この25日間から始まった蓄積は、500件を超える知的アイデア（全件ブロックチェーンで存在証明済み）、うち166件のJ-KISS投資評価基準を満たすIPポートフォリオ、特許1件出願・1件準備中へと成長した。

なぜ、同じAIからこれほど異なる結果が出たのか。そして、この成果が再現可能なら、社会や経済システムは変わるのではないか。この問いが、本シリーズの出発点である。

Scale Outに直交するもう一つの軸 — Deep Out

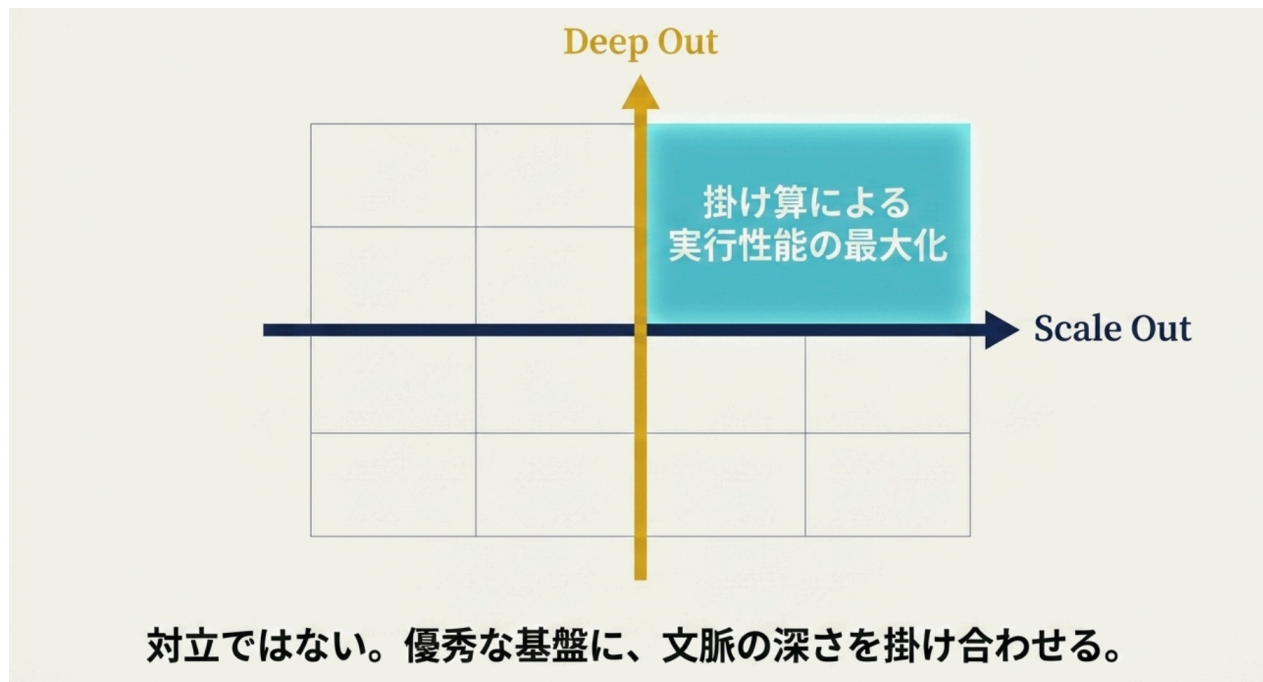
現在のAI開発には、支配的な方向性がある。**Scale Out**（スケールアウト）。モデルを大きくし、学習データを増やし、計算資源を増やす。数千億ドルの投資が、この方向に流れている。

Scale Outは実証された戦略であり、現在のAIの基盤を形づくっている。この方向性に異論はない。

私が25日間で体験したのは、その基盤の上に重なる、もう一つの次元だ。

Deep Out（ディープアウト）。同じAIに文脈を蓄積し続けることで、出力の質が非線形に変わる。モデルを変えるのではなく、モデルと人間の間にある「文脈」を深くする。

Scale Outが「基盤を広げる」アプローチだとするなら、Deep Outは「同じ基盤の上で深さを掘る」アプローチだ。



Scale Out × Deep Out: Scale Out（モデルを大きく）とDeep Out（文脈を深く）は対立ではなく掛け算

この二つは対立概念ではない。掛け算だ。Scale Outの恩恵である優秀なAIに、Deep Outによる文脈の深さが重なったとき、東京のマンションの一室から393件のアイデアが生まれた。

問いかけ — あなたの組織で何が起きているか

ここで、二つの問いを立てたい。

毎日のやり直し — 文脈が蓄積されない構造

あなたの組織の社員は、文脈の蓄積がない対話を毎日やり直していないだろうか。

汎用的なチャット型AIを使っている限り、それは構造的にこうなる。蓄積も引き継ぎもない、使い捨ての対話。賢い回答が返ってくるが、先週と同じ質問をしても、AIは覚えていない。チャット履歴は個人のブラウザに埋もれ、隣の席の同僚が同じ質問を繰り返している。

私の実験で言えば、それは文脈の蓄積がない0.9件/日の状態にとどまり続けることを意味する。浅い対話をいくら積み重ねても、質は変わらない。

知能の散逸 — 見えない資産が揮発している

しかし、より深刻な問題がある。あなたの組織の知的資産が、今この瞬間も消え続けているだろうか。

優秀な社員がAIと対話しながら、革新的な仮説を練り上げる。しかし、その知的な格闘は個人のチャット履歴の中に閉じている。いずれ新しいチャットに埋もれて探せなくなる。その社員が退職すれば、知見は跡形もなく消える。

AI時代の属人化は、引き継ぎ書すら書けない。なぜなら、AIとの対話で生まれた知見は、本人さえも言語化できていない「感覚的なもの」であることが多いからだ。金庫を開けっ放しにしているのと同じだ—ただし、盗まれるのではなく、揮発している。

これは単なる効率化の遅れではない。**知能の散逸**である。個人の生産性が向上しても、組織の知的資産は蓄積されない。深く潜って初めて、景色が変わる。

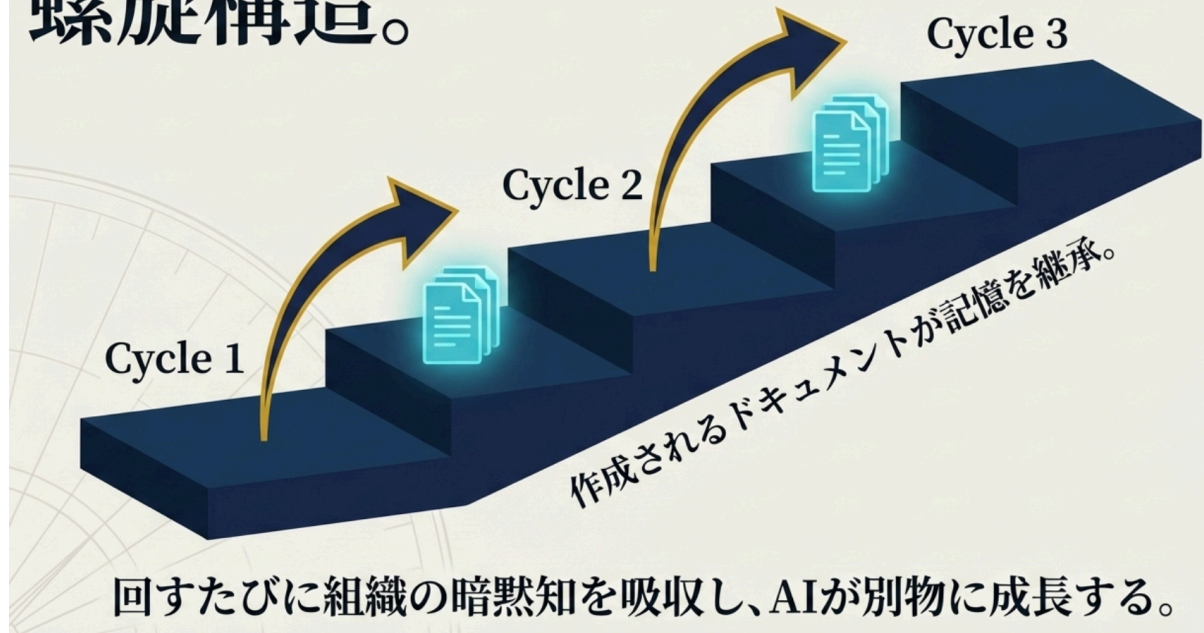
CycleGen — 深さを再現する方法

この実験から生まれた方法論を、**CycleGen**（サイクルジェン）と名づけた。

約60分の人間とAIの協働サイクル。前半の約30分でAIが自律的に作業し、成果物をファイルとして出力する。後半の約30分で人間がその成果を確認し、判断・承認・方向修正を行う。これを繰り返す。

核心は「ドキュメントはAIが書く。人間は判断する」という役割分担だ。

螺旋構造。



CycleGenの螺旋構造: CYCLE 1 → CYCLE 2 → CYCLE 3... 作成されるドキュメントが記憶を継承して蓄積し、回すたびに深くなる

AIが作成した文書は、次のサイクルの文脈として蓄積される。サイクルを重ねるほど、AIはあなたの組織の判断基準、過去の失敗、言語化されていない暗黙知を「知っている」状態に近づいていく。10サイクル目のAIは、1サイクル目のAIとは別物のように振る舞う。モデルは同じだ。文脈だけが違う。

料理のことを考えてみてほしい。料理が自然に上達する人は多い。なぜか。「味見をする」「食べる」という行為が、すべての調理プロセスに対する強制的なチェックポイントとして機能しているからだ。塩が足りなければ味見でわかる。家族の反応でわかる。フィードバックが、料理という行為に最初から組み込まれている。

あなたの仕事に「食べる」に相当するものがあるだろうか。提案書を書く途中で、誰かが味見をしてくれるだろうか。ほとんどの知的労働には、それが無い。完成するまで誰にもチェックされない。AIとの対話も同じだ——チャットで聞いて、答えが返ってきて、それで終わり。「食べる」がない。

この構造的な問題は、個人の使い方の問題ではない。「深さ」を蓄積する仕組みが存在しないことの問題だ。CycleGenの「1時間ごとに人間が判断する」という設計は、知的労働に「食べる」を埋め込む試みだ。

「なぜ30分なのか。AIの性能は急速に向上している。もっと長く自律的に任せればよいのでは？」
——この問いは自然だ。

確かに、AIが単独で完結する定型業務——コード生成、データ処理、翻訳——では、しっかり設計すればAIに長時間任せても機能するかもしれない。

しかし、Deep OutとCycleGenが対象とする領域は異なる。事業開発、マーケティング、戦略立案——正解のない問いを扱う領域では、必ず人間の判断が必要だ。AIの出力を鵜呑みにした瞬間、方向がずれる。そして、AIの仕事は速い。30分もあれば、人間が評価・判断すべき成果物が十分に出揃う。放置すれば、誤った前提の上に誤った結論が積み上がるだけだ。

30分は「AIの限界」ではない。「人間の判断が介入すべき最適な間隔」だ。

CycleGenは特定のAI製品に依存しない。原理はシンプルだ。文脈を構造化し、蓄積し、次のサイクルに引き継ぐ。この型を守れば、どのAIでも深さを掘ることができる。

2026年4月の現状

筆者の体験は事業開発領域でのDeep Outだ。複数ドメインを同時に思考し、393件のIPを生み出した。

当初、これは私一人の体験にすぎなかった。しかし、その段階はすでに終わっている。

同僚の白木は、Google AntigravityとCycleGenを組み合わせ、顧客対応業務において週10時間の非生産時間を約15分に削減した（95%削減）。さらに、白木は独立して特許レベルの知的財産を生み出した。私が指示したのではない。CycleGenの型を回し続けた結果、白木自身の領域で、白木自身のブレイクスルーが起きた。

その後、5名以上の実践者が異なる業界でCycleGenを採用し、生産性の向上を報告している。

ただし、正直に述べる。ここまでの再現は「効率化」——つまり、速くなった、楽になった——の領域にとどまっている。私が最初に体験した「質的変容」——見えるものが変わった、問いの質が変わった——が他者でも再現されるかどうかは、まだ検証の途上だ。効率化の再現と、変容の再現は、別の問題である。

このシリーズが問いかけるのは、その先だ。あなたの領域で、あなた自身が深さを掘ったとき、何が起きるか。効率化を超えて、変容に到達するか。その発見を教えてください。

あなたが今日できること

一つだけ。

明日の朝、AIとの対話を始める前に、一つだけ試してみてください。「先週、同じテーマで聞いたとき、こういう回答だった。今日はその続きから始めたい」と、過去の文脈を自分の言葉で伝えてみる。

その一手間で、AIの出力が変わるかどうか。変わるとしたら、何が変わるか。

文脈を渡すだけで出力が変わる——その体験が、Deep Outの入口になる。

本シリーズについて

「Economy of Depth」は、この体験と方法論を、異なる領域の読者に向けて問いかけるシリーズだ。

書籍『Deep Out — はじまりの航海日誌』が体験の記録だとするなら、本シリーズは「あなたの世界に何が起きるか」を一緒に考える文書群である。

シリーズ構成

ペーパー	タイトル	問いかけ
Paper 01	野良AIの危機	あなたの組織のAI活用は「資産」か「散逸」か
Paper 02	Economy of Depth	Scale Out前提の産業政策は、Deep Out時代に機能するか
Paper 03	思考のOSをどう育てるか	AI時代のリベラルアーツと専門スキルの関係
Paper 04	AIは鏡である	深い協働は人間の自己認識に何を問いかけるか
Paper 05	深さの民主化	大規模な資本なしに、深さで社会を変えられるか
Paper 06	IP Corporationの可能性	AI時代の知的財産は現行制度で適切に扱えるか

各ペーパーは独立して読める。関心のある領域から読み始めてほしい。

さらに深く

- **体験を読む:** 『Deep Out — はじまりの航海日誌』 (Amazon Kindle / ペーパーバック) — 25
日間の航海の全記録

<https://www.amazon.co.jp/dp/B0GSWH6HYG>

- **方法論を試す:** deepout.org — CycleGen コンセプトブック

https://deepout.org/images/CycleGen_ConceptBook_v03.pdf

- **対話する:** signal@deepout.org
